



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	児童の登校を巡る意識に関する研究
Author(s)	屋良, 皇稀; 淡野, 将太
Citation	琉球大学教育学部紀要 = Bulletin of Faculty of Education University of the Ryukyus(95): 57-63
Issue Date	2019-09
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44969
Rights	

児童の登校を巡る意識に関する研究

屋良 皇稀・淡野 将太

本研究の目的は、児童の登校を巡る意識を登校回避感情とその促進要因及び抑制要因から検討し、不登校の未然防止や支援に示唆を提供することである。調査対象は小学校第5学年及び第6学年 220名（男子 106名、女子 114名）だった。児童の登校回避感情を抑制する要因として、児童全体では「学校魅力」が有意な影響を与えていた。登校回避感情について、頻度及び強度を測定し登校回避感情の感じ方で6クラスターに分類した。クラスターごとでは、「習慣」が登校回避感情を抑制する要因として、有意な影響を与えていた。児童全体とクラスターごとの分析で異なる因子が登校回避感情に影響を与えていたため、登校回避感情を「頻度」及び「強度」の双方からの測定を、児童を対象に行うことの意義が示されたと言える。

キーワード：不登校、登校回避感情、児童、頻度、強度

問題と目的

小学校における不登校児童（「病気」や「経済的理由」による者を除く何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいは登校したくとも出来ない状況にある年間30日以上欠席した児童）の人数は平成25年度から増加傾向にあり、平成29年度の小学校における不登校児童数は35,032人で過去最高となっている（文部科学省，2018）。増加傾向にある不登校の未然防止や支援を目的とした研究は、実際に学校を30日以上欠席している児童生徒だけではなく、森田（1991）、本間（2000）、藤井（2005）及び中島・原（2009）のような、欠席せず学校に登校している児童生徒を対象にした研究も行われている。

森田（1991）では、実際の欠席だけではなく学校に向かう感情の側面からも調査を行い、学校に行きたくないと思う気持ちを登校回避感情としており、本研究はこの定義に従い進める。森田（1991）では中学2年生を対象に、登校回避感情をどれだけ経験しているのか「よくあった」から「まったくなかった」の4段階で調査し、登校回避感情の経験頻度と不登校行動の関係について分析した。その結果、不登校行動が早退や遅刻から欠席へと進行するにつれて、登校回避感情の経験頻度が増加することを明らかにし、登校回避感情の経験頻度は不登校の一つの要因であると考察している。しかしこの研究では登校回避感情を、学

校に行きたくないという感情の強さの側面からは調査していない。

中学生の欠席願望や登校理由について研究した本間（2000）では、自由記述による調査で得られた欠席の促進理由と登校理由から、岡安・嶋田・丹羽・森・矢富（1992）の「ストレスサー尺度」と複数の中学校教師の意見を参考に、欠席促進理由と登校理由を感情の強さによって測定する項目を作成し、調査を行った。その結果、因子分析より中学生の欠席を促進する要因として「身体・気分」、「学校不満」、「学校不安」、「学外誘惑因」の4因子、さらに登校する理由として、「自己基準」、「親圧力」、「習慣」、「学校魅力」、の4因子を見出した。しかしこの研究では登校回避感情をどれだけの頻度で経験しているのかについては調査されていない。

登校回避感情とその促進要因と抑制要因について研究した中島・原（2009）では、登校回避感情を「よくある」や「あまりない」の様な経験頻度を表す言葉によって評定させることを「頻度」とし、「強く感じる」や「あまり感じない」の様な感情の強さを表す言葉によって評定させることを「強度」として、「頻度」と「強度」を組み合わせる方法を開発し、促進要因と抑制要因の調査を行なった。クラスター分析により「頻度」と「強度」の評定パターンによって児童を5クラスターに分類した。また因子分析より、登校回避感情の促進要因として「孤独・対人不安」、「気分・学校外誘因」、「疲労・身体因」、「学習意識低下」、

「教師回避」,「家庭内問題」,「暴力性脅威」の7因子を見出し,抑制要因として「道具的理由」,「楽しさ」,「向上心」,「社会通念」,「欠席自体への抵抗感」,「親への配慮」,「親圧力」の7因子を見出した。そして,登校回避感情を目的変数,抽出した各因子を説明変数とした重回帰分析を行い,登校回避感情に影響のある因子の検討を行った。その結果,「気分・学校外誘因」,「家庭問題」,「楽しさ」,「孤独・不安」,「社会通念」が登校回避感情に有意な影響を与えていた。またクラスターごとの登校回避感情に対し異なる因子が影響を与えており,登校回避感情を「頻度」と「強度」の双方から測定することで,より詳細な分析が行えるということを明らかにした。しかし,森田(1991),本間(2000),中島・原(2009)で調査の対象とされているのは全て中学生であり,児童を対象とした調査は行われていない。

本研究は,児童の登校回避感情を測定するために,中島・原(2009)を参考に「頻度」と「強度」の両方の側面から測定する事が出来る質問紙を作成する。また本間(2000)を参考に児童の欠席を促進する要因と学校に行く理由を調査する。それらの結果から,児童の欠席の促進理由,登校する理由についてどの様な関係があるのか分析を行う。

方法

調査対象及び調査時期

沖縄県内の小学校2校において調査を行った。対象者は小学校第5学年及び第6学年220名(男子106名,女子114名)だった。調査の時期は2018年7月から2018年9月だった。

質問紙の構成

登校回避感情を「頻度」と「強度」の双方の視点で測定出来る質問紙を作成するため,中島・原(2009)の感情の強度にしたがって「ほんの少し思う」,「少し思う」,「強く思う」,「非常に強く思う」の4段階に設定された4項目について感じる頻度を「全くない(1点)」,「あまりない(2点)」,「時々ある(3点)」,「よくある(4点)」の4段階評定法で測定した。登校回避感情の促進要因を検討するために,中島・原(2009)の登校回避感情

の促進要因を評定できる計34項目を,また本間(2000)登校回避感情の抑制要因を測定できる計15項目をそれぞれ採用し,「全く当てはまらない(1点)」,「あまりあてはまらない(2点)」,「どちらかといえばあてはまらない(3点)」,「どちらかといえばあてはまる(4点)」,「よくあてはまる(5点)」,「とてもよくあてはまる(6点)」の6段階評定法で測定できる質問紙を作成した。抑制要因を測定する質問項目数について,中島・原(2009)の36項目では児童の負担が大きいと判断したため,本間(2000)の15項目を採用した。

結果

登校回避感情のクラスター分析

強度と頻度の双方から評定させた4項目への評定から,児童を登校回避感情の感じ方で分類するためにクラスター分析(word法)を行った。テンドグラムより,6クラスターに分類した。中島・原(2009)では,登校回避感情の感じ方を5クラスターに分類していたが,5クラスターでは説明できないグループがあったため6クラスターを採用した。登校回避感情の感じ方の特徴について,クラスター1(62名)は,強度の1点及び2点の項目に対する頻度の評定値が主に2点及び3点であり,それ以外の強度の項目に対する頻度の評定値が主に1点であった。よって「弱い部類の登校回避感情を,中程度の頻度で感じている児童」とした。クラスター2(59名)は,主に強度の4項目全ての項目に頻度の評定値を2点以上としている児童であり,また頻度の評定値は2点から3点が主であった。よって「あらゆる強度の登校回避感情を,中程度の頻度で感じている児童」とした。クラスター3(35名)は,強度の4項目に対する頻度の評定値が全て1点だったため「あらゆる強度の登校回避感情を,感じることの無い児童」とした。クラスター4(28名)は,強度のほぼ全ての項目に対する頻度の評定値が3点である児童が主であった。よって「あらゆる強度の登校回避感情を,やや高頻度で感じている児童」とした。クラスター5(24名)は,強度の1点の項目に対する頻度の評定値が2点あるいは3点であり,それ以外の強度の項目に対する頻度

の評定値が1点である児童が主であった。よって「ごく弱い部類の登校回避感情を、中程度の頻度で感じている児童」とした。クラスター6(10名)は、強度の3つ以上の項目に対する頻度の評定値が2点である児童が主であった。よって「あらゆる強度の登校回避感情を、少ない頻度で感じている児童」とした。

登校回避感情の促進要因の因子分析

促進要因34の項目について、最尤法プロマックス回転による因子分析を行なった結果、固有値が12.8, 3.1, 2, 1.5, 1.3, 1.1, 1, 1, (以下略)と推移した。中島・原(2009)では7因子を抽出していたが、項目削除により第7因子の信頼性係数が、信頼性を受容するに値しないと判断したため($\alpha=.567$)、最終的に6因子を採用した。項目の採用基準を負荷量が.35以上であること、2つ以上の因子に.35以上の負荷量がないこととした。基準に満たなかった6項目を削除した。

因子分析の結果をTable 1に示す。第1因子は「ねむたいとき」、「なんとなく行きたくないとき」、「つかれているとき」など児童の気分や身体的な疲労を表す項目であった。よって7項目からなる第1因子を「気分・疲労」因子($\alpha=.871$)と命名した。次に、第2因子は「宿題や提出物ができていないとき」、「先生に強くしかられたとき」、「友だちとけんかしたとき」など児童が学校生活において感じている対人及び学習に対する不安を表す項目であった。よって7項目からなる第2因子を「学校不安」($\alpha=.836$)と命名した。また、第3因子は「学校に居場所がないと感じるとき」、「休み時間に居場所がないと感じるとき」など、児童が感じている孤独を表す項目であった。よって4項目からなる第3因子を「孤独感」因子($\alpha=.907$)と命名した。「家庭内がごたごたしているとき」など児童の家庭における問題を表す項目に負荷量が大きい計3項目の第4因子を「家庭問題」因子($\alpha=.817$)とした。また、「友だちが一緒に休もうと言っているとき」、「おもしろいテレビやラジオの番組があるとき」など学校以外からの誘惑を表す3項目からなる第5因子を「学校外誘惑」因子($\alpha=.701$)と命名した。「いじめにあったとき」などいじめに関する項目などの3項目からなる第6因子を「いじめ」因子($\alpha=.823$)と命名した。

登校回避感情の抑制要因の因子分析

抑制要因15の項目について、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った結果、固有値が4.5, 2.6, 1.2, 1.0, 0.9(以下略)と推移したため、本間(2000)と同様に4因子を抽出した。項目の採用基準を負荷量が.35以上であること、2つ以上の因子に.35以上の負荷量がないこととした。基準に満たなかった2項目を削除した。

因子分析の結果Table 2に示す。第1因子は4項目であり、因子負荷量の大きい項目は「自分でなにごともできる力をつけるため」、「将来のため」など、児童自身が目的意識を持っていることを表す項目であった。よって第1因子を「目的意識」因子($\alpha=.794$)と命名した。第2因子は3項目であり、因子負荷量の大きい項目は、「行くことが当然だから」、「あたりまえになっているから」など、登校が児童の習慣となっていることを表す項目であった。よって第2因子を「習慣」因子($\alpha=.720$)と命名した。第3因子は4項目であり、因子負荷量の大きい項目は「親に怒られるから」、「親が行けというから」など児童が親から登校するように強いられていることを表す項目であった。よって第3因子を「親圧力」因子($\alpha=.622$)と命名した。第4因子は「友だちと会えるから」など2項目からなり、児童が感じている学校に対する魅力を表す項目であった。よって第4因子を「学校魅力」因子($\alpha=.754$)と命名した。

登校回避感情と各因子の相関分析

児童全体及び児童の登校回避感情の感じ方に応じて分類したクラスターごとに、登校回避感情に影響を及ぼす要因を検討するため、因子分析によって抽出した各因子について相関分析を行った(Table 3)。登校回避感情の値については、中島・原(2009)より、強度にもとづいて評定された4段階の各項目の値に、頻度にもとづいて評定された各評定値を乗じ、4段階それぞれの積の総和で算出した。この算出方法は、中島・原(2009)以外に、岡安他(1992)でストレスの経験とその強さを評定した方法と同様である。

全児童の登校回避感情と各因子の相関

相関分析の結果、児童全体の登校回避感情に「気分・疲労」($r=.514, p<.01$)、「学校不安」($r=.384, p<.01$)、「孤独感」($r=.443,$

Table 1 登校回避感情の促進理由の因子分析

項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6
【気分・疲労】 ($\alpha=.871$)						
ねむたいとき	.862	.081	-.095	-.150	-.032	.043
なんとなく行きたくないとき	.790	.001	.084	-.089	.049	-.078
休みの日の次の日	.762	.069	-.006	-.093	-.001	.021
つかれているとき	.746	-.141	.039	.168	-.172	.108
学校に行くまでがめんどうなとき	.607	-.160	-.084	.249	.154	.041
登校の準備がめんどうくさいとき	.554	.100	.014	.024	.033	-.012
朝ねぼうしたとき	.407	.279	.027	.023	-.125	.050
【学校不安】 ($\alpha=.836$)						
宿題や提出物ができてないとき	.108	.743	-.015	.019	-.021	.009
先生に強くしかられたとき	-.035	.680	-.050	.184	-.115	.049
友だちとけんかしたとき	-.082	.631	.001	.273	-.164	.117
勉強が分からないとき	.060	.546	.257	-.211	.206	-.008
テストがあるとき	-.123	.523	.158	-.165	.169	-.083
きらいな先生と会うとき	.156	.456	-.043	.110	.120	-.032
嫌いな科目があるとき	.235	.437	-.122	.001	.127	-.086
【孤独感】 ($\alpha=.907$)						
学校に居場所がないと感じるとき	-.080	-.075	.851	.055	-.009	.128
休み時間に居場所がないと感じるとき	-.044	.051	.822	-.017	-.073	.134
気の合う友だちがいないとき	.122	.147	.809	.022	-.128	-.132
仲の良いグループがないとき	-.027	.036	.759	.041	.072	.010
【家庭問題】 ($\alpha=.817$)						
家庭内がごたごたしているとき	-.096	.087	-.095	.800	.129	.125
家でいやな事があったとき	.020	.124	.169	.709	-.118	-.137
人に会うのがめんどうなとき	.195	-.198	.316	.525	.167	-.169
【学校外誘惑】 ($\alpha=.701$)						
友だちと一緒に休もうと言っているとき	-.031	-.028	-.030	.143	.649	.075
おもしろいテレビやラジオの番組があるとき	-.012	.033	-.065	-.046	.639	.027
出かけたところがあるとき	.058	.307	-.023	.114	.491	-.001
【いじめ】 ($\alpha=.823$)						
いじめにあったとき	.003	-.107	.061	-.030	.061	.874
いじめの子がいるとき	.050	.133	-.038	-.010	-.028	.785
友だちにいやなことを言われたとき	.067	-.020	.235	-.016	.114	.525

因子間相関

	F2	F3	F4	F5	F6
F1	.616	.519	.589	.510	.256
F2		.578	.441	.493	.415
F3			.565	.314	.410
F4				.311	.278
F5					.254

Table 2 登校回避感情の抑制要因の因子分析

項目	F1	F2	F3	F4
【目的意識】 ($\alpha=.794$)				
自分でなにごとでもできる力をつけるため	.846	-.045	-.270	.069
勉強しなければならないから	.693	.090	.154	-.152
将来のため	.681	.004	-.054	.124
みんなと差がつくから	.636	-.013	.232	-.095
【習慣】 ($\alpha=.720$)				
行くことが当然だから	-.057	.921	-.217	.009
あたりまえになっているから	.104	.603	.038	.070
行かないのは悪いことだから	.162	.449	.286	-.063
【親圧力】 ($\alpha=.622$)				
親におこられるから	-.064	.004	.694	.101
親が行けというから	.063	-.116	.688	.002
家でやりたい事があるとき	.021	-.190	.426	.025
勉強がおくれるから	.219	.079	.415	.132
なんとなく	-.064	.178	.412	-.040
【学校魅力】 ($\alpha=.754$)				
友だちとあえるから	-.117	.023	.209	.923
学校が楽しいから	.173	.013	-.199	.641

因子間相関

	F2	F3	F4
F1	.630	.205	.407
F2		.291	.289
F3			-.255

$p < .01$), 「家庭問題」 ($r = .399, p < .01$), 「学校外誘惑」 ($r = .289, p < .01$), 「いじめ」 ($r = .243, p < .01$), 「親圧力」 ($r = .304, p < .01$) が正の相関を示し, 「目的意識」 ($r = -.213, p < .01$), 「習慣」 ($r = -.179, p = .01$), 「学校魅力」 ($r = -.490, p < .01$) は負の相関を示した。

クラスターごとの登校回避感情と各因子の相関

相関分析の結果, クラスター2の登校回避感情に対し, 「目的意識」 ($r = -.311, p = .02$), 「習慣」 ($r = -.310, p = .02$), 「学校魅力」 ($r = -.290, p = .03$) が負の相関を示した。クラスター4の登校回避感情に対し, 「気分・疲労」 ($r = .487, p = .02$), 「学校不安」 ($r = .453, p = .04$) が正の

相関を示し, 「習慣」 ($r = -.350, p = .09$) が負の相関を示した。

クラスター5の登校回避感情に対し, 「親圧力」 ($r = .505, p = .02$) が正の相関を示した。

登校回避感情の抑制に影響を及ぼす要因

児童全体及び登校回避感情の頻度と強度によって分類した各クラスターごとに, 登校回避感情に影響を及ぼす要因について検討するため, 登校回避感情を目的変数とし, 促進及び抑制の各因子を説明変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(Table 4)。目的変数とする登校回避感情の値については, 相関分析の際の算出方法と同様である。

Table 3 登校回避感情と各因子の相関関係

	相関係数						
	全体	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	C 6
気分・疲労	.514**	.174	-.064	.000	.487*	.057	-.399
学校不安	.384**	.143	-.166	.000	.453*	.253	.114
孤独感	.443**	.125	-.095	.000	.282	-.074	-.320
家庭問題	.399**	.166	-.040	.000	.050	-.200	-.483
学校外誘惑	.289**	.211	-.071	.000	.229	.271	-.013
いじめ	.243**	.228	-.054	.000	.209	-.186	-.448
目的意識	-.213**	.155	-.311*	.000	-.017	-.068	.103
習慣	-.179*	.086	-.310*	.000	-.350	.268	-.068
親圧力	.304**	.059	-.046	.000	.312	.505*	-.182
学校魅力	-.490**	.114	-.290*	.000	-.105	.013	.159

** $p < .01$, * $p < .05$

児童全体を対象とした重回帰分析の結果、「気分・疲労」($\beta = .278, p < .01$), 「学校魅力」($\beta = -.368, p < .01$), 「孤独感」($\beta = .192, p < .01$)は登校回避感情に有意な影響を与えていた ($R^2 = .418$)。各クラスターごとの重回帰分析の結果、クラスター2では登校回避感情に対し「習慣」因子が ($R^2 = .080, \beta = -.283, p = .04$), クラスター4では登校回避感情に対し「気分・疲労」因子が ($R^2 = .243, \beta = .493, p = .03$), クラスター5では登校回避感情に対し「親圧力」因子が ($R^2 = .237, \beta = .487, p = .03$), それぞれ有意な影響を与えていた。

考察

本研究では、児童の登校を巡る意識を登校回避感情とその促進要因、抑制要因について「頻度」と「強度」の双方から調査及び分析を行なった。そして、児童を対象に双方から評定を行うことの意義、そして児童の登校回避感情を抑制する要因について検討した。

まず児童全体の登校回避感情に、促進要因として「気分・疲労」、「孤独感」が、有意な影響を与えていた。よって、学校及び家庭が児童の心身に働きかけること、教師が児童の人間関係を良好に保つ取り組みを学級内で行う必要がある。また抑制要因として「学校魅力」が有意な影響を与えていることから、学校行事などを工夫し学校の魅力を高めることが重要である。

次にクラスター2について、「習慣」が登校回避感情を抑制すると言えるが、クラスター2が「あらゆる強度の登校回避感情を、中程度の頻度で感じている児童」であるため、1度習慣が乱れると学校を欠席する可能性がある。よってクラスター2に分類された児童に対し、学校が地域や家庭と連携し登校を習慣づける取り組みが有効である。

また最も不登校に近いと考えられるクラスター4の「あらゆる強度の登校回避感情を、やや高頻度で感じている児童」について、抑制要因を明らかにできていないため、現状では促進要因である「気分・疲労」を軽減にする取り組みが重要である。そのために、保健室登校などの取り組みを行い、児童の心身の回復を図りつつ、徐々に教室で学習が出来るように働きかける事で、登校回避感情を軽減し不登校の改善につながる。

クラスター5の「ごく弱い部類の登校回避感情を、中程度の頻度で感じている児童」には、「親圧力」が促進要因として影響を及ぼしている。よって、親や保護者が強く登校するように促さないように保護者と教師が確認し、支援の方法対応を考える事が有効である。

児童の登校回避感情を目的変数とした重回帰分析の結果が、児童全体を対象とした分析と各クラスターそれぞれを対象とした分析で異なる因子が影響を与えていることが示された。これは児童全体を対象にした分析では明らかにされなかった要因が、登校回避感情を「頻度」と「強度」の双方から評定し、その特徴によって児童を分類する

Table 4 登校回避感情に影響を及ぼす要因（重回帰分析）

	全体	C2	C4	C5
気分・疲労	.278**		.493*	
学校不安				
孤独感	.192**			
家庭問題				
学校外誘惑				
いじめ				
目的意識				
習慣		-.283*		
親圧力				.487*
学校魅力	-.368**			
R ²	.418**	.080*	.243*	.237*

** $p < .01$, * $p < .05$

ことで、その特徴に応じた促進及び抑制要因が明らかになったと言える。よって、児童を対象にした、登校回避感情を「頻度」と「強度」の双方の視点で評定することで、より詳細な分析を行うことが可能であり、双方から評定することの意義が示されたと言える。

本研究で得た知見と、不登校とソーシャルスキルについて研究した五十嵐（2011）や、不登校に対する教師の支援方法を検討した山本（2007）、教師や保護者、カウンセラーの連携による不登校支援を検討した田村・石隈（2003）を参考に、不登校支援を行う。本研究で得られた知見と不登校支援の先行研究を組み合わせる事が不登校の予防及び支援に効果的である。

今後の課題として、小学校低学年及び中学年を対象とした調査と分析が挙げられる。全学年を対象とした調査及び分析を行う事で、小学校6年間を通した支援方法を検討できる。加えて、本間（2000）や中島・原（2009）で対象となっていない中学校第1学年及び第3学年も対象とする事で、義務教育9年間を通した不登校の支援方法を検討できる。

引用文献

藤井 義久 (2005). 児童の学校嫌いを生みだす原因に関する研究 感情心理学研究, 12, 24-29.

本間 友巳 (2000). 中学校の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.

五十嵐 哲也 (2011). 中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連 教育心理学研究, 59, 64-76.

文部科学省 (2018). 平成 29 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査の結果 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm (閲覧日: 2019 年 4 月 16 日)

森田 洋司 (1991). 「不登校」現象の社会学 文学社

中島 義実・原 明子 (2009). 登校回避感情の類型と、促進要因・抑制要因との関係—登校回避感情の頻度と強度、双方からの測定による類型化の試み— 研究論文集・教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集, 2, 1-8.

岡安 孝弘・嶋田 洋徳・丹羽 洋子・森 俊夫・矢富 直美 (1992). 中学生の学校ストレスナーの評価とストレス反応の関係 心理学研究, 63, 310-318.

田村 節子・石隈 利紀 (2003). 教師・保護者・スクールカウンセラーによるコア援助チームの形成と展開・援助者としての保護者に焦点をあてて 教育心理学研究, 51, 328-338.

山本 奨 (2007). 不登校状態に有効な教師による支援方法 教育心理学研究, 55, 60-71.